

沖縄における「自立／自己決定権」論—その系譜と展望

仲里効 2011/9/25

<40年かけてようやく40年前にたどり着く>「復帰＝併合」後40年、われわれはどのような時間を生きてきたのだろうか。沖縄とは？ 日本とは？ 国家とは？ 近代とは？ アジアとは？ ……まず、無意識の前提、当たり前だと思っている常識や通念を疑ってみること。併合と分離と再併合を生きてきた沖縄の歴史意識、その<境界>経験と潜勢力を「琉球共和社会憲法」と「琉球弧の自己決定権」から考え直してみたい。そのことは同時に沖縄が<主体>を想像／創造することはどのようなことなのかを明らかにしていくことにもなる。

⇒沖縄の自己決定権＝構成的権力の可能なる時空のために

□9・17北京魯迅博物館でのシンポジウムから

「ケーテ・コルヴィツは沖縄によく似合う」ということ／沖縄と魯迅をめぐって／沖縄の中国想像・中国の沖縄想像／東アジアを横断する、あるいは歴史の交差点に立つこと

1. 時代・情況、その熱と渦

- 1) <在日>という認識——出沖縄、東京、そして沖縄青年同盟
- 2) 70年安保・沖縄、ヴェトナム戦争、そして全共闘・新左翼運動

2. 転形期の沖縄—「反復帰論」が生まれた背景

東アジアにおける二つの戦後—「日本型」と「沖縄・韓国型」／「冷戦」と「潜在主権」／沖縄占領の原像としての「天皇メッセージ」／終わらない植民地主義

- 1) 沖縄戦後史の転換と1969年日米共同声明／全軍労闘争とヴェトナム戦争
- 2) 復帰運動の歴史と限界

なぜ沖縄の戦後抵抗は「日本復帰」運動という形をとったのか

- ①冷戦／アメリカのむき出しの占領／サンフランシスコ講和条約／帰属論争
- ② [反米] から「祖国・日本」の想像→戦前と戦後の断絶と連続＝植民地主義の内面化／1960年沖縄県祖国復帰協議会の結成／1965年佐藤訪沖／一体化路線の展開→日米共同声明→日米共同管理体制＝72年沖縄返還／併合の地ならしとしての主席公選、国政参加選挙

沖縄にとって<72年復帰>とは？ 日本との出会い直し／出会い損ない⇒「復帰」ではなく「併合」⇒天皇制と自衛隊／「復帰記念三大事業」

3. 「反復帰」は内破する知である

1) 『沖縄・本土復帰の幻想』（吉原公一郎編、三一書房、1968年）

「沖縄から透視される『祖国』（いれい・たかし）と討論：「沖縄にとって『本土』とは何か」（伊礼孝・川満信一・中里友豪・真栄城啓介・嶺井政和）
「沖縄から透視される『祖国』（いれい・たかし）／「国家というものは、人から愛されたりするはずのない冷酷なものだ。しかし、国家は人から愛されてもふしぎのないものをことごとく殺し、ほろぼしてしまう。こういうわけで、国家よりほかにないから、人は国家を愛さないわけにはいかなくなるのだ。これが現代人の受けている精神的拷問である」と、シモーヌ・ヴェーユは書いていますが、沖縄にとって、もはや『祖国』とは日本しかありえないということ、それ以上の精神的拷問がありましようか。そのことを拷問として感受しつつ、なお『祖国復帰闘争』の必然性、その内実を究明しなければならない時点に、沖縄の私たちは立たされています」

川満VS伊礼・中里・嶺井論争⇒復帰運動の限界の意識化と「祖国」「日本」を相対化する視点の獲得⇒69年2・4ゼネストの流産と詩「島」

2) 叢書『わが沖縄』第5巻「沖縄の思想」（木耳社、1970年）

新川明「非国民の思想と論理—沖縄における思想の自立について」

川満信一「沖縄にとって天皇制思想とは何か」

岡本恵徳「水平軸の発想—沖縄における『共同体』の論理」

3) 新川明『反国家の兇区』（現代評論社、1971年⇒1996年に社会評論社から復刻）

「幻像としての日本」／「沖縄近代史研究の一視点—謝花昇・伊波普猷をめぐって」

「＜復帰＞思想の葬送—謝花昇論ノート1」「＜狂気＞もて撃たしめよ—謝花昇ノート2」

「新たな処分への文化的視座」／「＜憲法幻想＞の破碎」「＜復帰＞思想の虚妄」

「『差別告発』から『反逆』の持続へ」「＜反国家の兇区＞としての沖縄」

1973年に『異族と天皇の国家』（二月社）

2000年に『沖縄・統合と反逆』（筑摩書房）

4) 川満信一『沖縄・根からの問い—共生への渴望』（泰流社、1978年）

「ミクロ言語帯からの発想」「沖縄祖国復帰の意味」「民衆論」「沖縄と日本の断層」

「戦後思想と天皇制」「宮古島・島共同体の正と負」「共同体論—可能性への模索」

1987年に『沖縄・自立と共生の思想』（海風社）



① 復帰思想の内在的批判／沖縄の近代＝植民地主義と同化主義批判⇒天皇制、沖縄学、沖縄民権運動、沖縄戦の「集団自決」

② 国政参加選挙拒否、投票ボイコット闘争



戯曲「人類館」の衝撃……トラッジ・コメディと主体の革命⇒「内なる阿Q」

4. 「反復帰」思想の構成的累進としての「琉球共和社会／共和国憲法」
 - 1) 80年代初頭に現れた自立構想⇒自治労県本の「沖縄特別県制」構想／玉野井芳郎の「沖縄自治憲章」
 - 2) 「新沖縄文学」第48号（1981年）特集「琉球共和国へのかけ橋」
「琉球共和社会憲法C私（試）案」と「琉球共和社会憲法F私（試）案」
5. 1995年少女暴行事件の衝撃
あらためて「沖縄戦」と「占領」と「復帰」の意味を問い直す／10・21県民大会で8万人結集／代理署名拒否／県民投票／独立をめぐる激論会（97年5月）
⇒若い世代の「反復帰」思想の再発見
6. 沖縄イニシャティブと普天間移設・新基地建設
沖縄における「新保守主義」の台頭⇒沖縄平和祈念資料館の日本軍展示改ざん問題／2000年沖縄サミット、2000円札／沖縄イニシャティブ
7. 記憶をめぐるタタカイと琉球弧の自己決定権の胎動
「集団自決」と「沖縄戦」／教科書検定撤回県民大会11万人、10年4・25大会での9万5千結集
 - 1) 「来たるべき沖縄の自己決定権—沖縄・憲法・アジア」（08）→思想資源としての「反復帰論」と「琉球共和社会憲法」／沖縄自治研究会の「沖縄自治州」論
 - 2) 2009年薩摩の琉球侵略400年・琉球処分130年→歴史意識の潜勢力
8. <国境>の顕現⇒台頭する領土ナショナリズム／東シナ海という<海のノモス>
2010年9月、尖閣列島周辺海域での中国漁船と海上保安庁巡視艇衝突事故
9. 構成的権力としての「琉球共和社会憲法」
沖縄から世界像提示／沖縄に内在する東アジア
「不可能性という胸ぐら」をつかみ、「無関心という王座」を引きずり下ろす。
 - 1) 西川長夫『<新>植民地主義論』（平凡社、06）所収「マルチニックから沖縄へ—独立の新しい意味をめぐって」（「もともと国家廃棄の宣言を、国家の基本法である憲法の形を借りて表明することは根本的な矛盾であろう。だが私はこの憲法試案を最初に読んだときの驚きと感動を忘れることはできない。暗い空の一角に急に明るい青空が開けた感じであった」）
 - 2) 孫歌「沖縄に内在する東アジア」（新崎盛輝中国語版『沖縄戦後史』の解説）
2008年、シンポジウム「来るべき自己決定権のために—沖縄・アジア・憲法」に

参加したときの感想「そこで感じ取ったのは、東アジアの半世紀あまりの歴史的な重みであり、それによって私は、歴史に参与するものが歴史の絡まり合う瞬間に出会う極度の緊張とその背後にある『失語状態』を体験することとなった」

「・・・同様に、川満信一が自身によって起草された『琉球共和社会憲法草案』を説明したとき、私が感じ取ったことも、実に言葉にするのが難しい感覚であった。この草案は現行の日本国憲法の代替案ではない。何故なら、それは『国家憲法』ではなく『社会憲法』であるからだ。」

「この『憲法』について、ユートピア的性格があると指摘するのは難しいことではない。1980年代においても、やはり同様な評価を受けていた。二十数年が経って、同じ批判がありつつ、しかも、沖縄の知識人は再びこの『憲法』を温め直したわけだが、それはむしろ、覚めた現実認識を獲得するがためであった。そのユートピア的性格について言及するとすれば、それは現実社会から隔たったものではなく、現実政治のなかに幾つかの『要素』を忍び込ませることで、現実の既成秩序を崩していく効果を持つことである。そういうわけで、その『憲法』は沖縄の将来を代表するものである。」

そして、今～・・・

1) 福島の影響

原発植民地と軍事植民地

トモダチ作戦と自衛隊の災害救助のイメージを動員⇒沖縄の自衛隊強化

軍事再編と中期防衛力構想＝島嶼防衛論⇒南西諸島への自衛隊配備

2) 「島」(69年) から「吃音のア行止まり」(06) まで—川満信一の詩から

母の死の床での出会い損ない／変貌する自然と社会／ことばの思想と自立

⇒68年体制の解体、歴史意識の潜勢力＝琉球弧の自己決定権